

(佐々木注) 2003年1月13日作成

原題は「バーク提督」原文はA4版25ページ(余白あり)。

以下、原文をそのままに、欄外にページを付与し余白をカットしたもの。

アーレーバーク提督に学ぶ

15. 1. 31

昨年は海上自衛隊創設五十周年の節目の年であったが、それにつけても思い出されたのが創設の父の一人、ADMIRAL ARLEIGH BURKE である。バーク提督(私どもは海軍式に、敬愛の念をこめて、バークさんと呼んでいるので、以後これに従う)については、みなさんは多かれ少なかれ承知していると思う。また谷光太郎教授が波濤の133号(1999年11月)及び159号(2002年3月)で詳しく紹介しておられるので、今日は、バークさんの一般的な経歴や業績については省略し、できるだけバークさん自身の語ったこと、やったことあるいは直接接した人の思い出などを中心にして、私どもの教訓とすべきことを話してみたい。

はじめに、バークさんの海上自衛隊創設への貢献について、簡単に申しておこう。1950年朝鮮戦争の勃発に伴い、バークさんはときのCN0シャーマン提督の特命を受けて、COMNAVFORFE(米極東海軍司令部)の参謀副長として、9月はじめに来日した。まだ戦争中の激しい敵対意識を持っていた彼が、どうして日本に親しい気持ちを持つようになったかを後日語っている。詳しいことは省略するが、その中に日本の海軍士官と知り合うようになった経緯が出てくる。

バークさんのクラスメートで、日本語を専修し、戦前日本駐在武官もやったピアス大佐という人が丁度東京にいて、日本が初めてのバークさんはよくこの人に相談し、野村吉三郎大将も草鹿任一中将もこのピアス大佐の紹介で会うようになったのである。草鹿さんとの初対面では、両者の人柄や気概、さらには厳しい対決の中でも失われないユーモアのにじみでたエピソードが大変興味深い。阿川弘之さんが文芸春秋96年8月号の巻頭随筆で紹介されているのでこれも省略する。野村さんとの交流は、海上自衛隊の創設とも関連があるので、少し触れておこう。バークさんは、日本人や他の東洋人を理解する助けになるだけの見識と人格を持った人を求め、ピアス大佐の勧めで野村さんに会った。最初の課目として野村さんの自宅を訪問したバークさんは、日本式に座らせられ、痺れが切れてきたら、それは精神の集中が足りないからだ、しっかり集中していれば痺れが切れるわけではない、と自分の弟子を躡るような調子で鍛えられたという。次からの課目の大部分は、バークさんのオフィスでの一回一時間ずつの会話で、これらを通じて日本人のものの見方、考え方、それが朝鮮人や中国人とどう違うかなどが少しずつ理解出来るようになり、そうして培われた洞察力は、後になって東洋人との交渉に大きく役に立ったとのことである。さらにこれらの交流を通じて、バークさんはすっかり野村さんの人柄に惚れ込み、一生を通じての親しい友人になっただけでなく、尊敬し信頼できる日本人のあることを知り、日本と日本海軍に対する認識をすっかり改めたという。丁度その頃、野村さんを頂点とする日本海軍有志の間では、海軍再建の計画が練られつつあり、一方極東海軍司令部では、ソ連から返却される古いフリゲート相当数をどうするか検討中であった。バークさんはこれらの艦はひどい状態であっても、少なくとも訓練には有用と考え、司令官のジョイ中將の同意を得て日本側に渡すことを考えた。しかし、本国の当局がどう考えるかは不確実であり、また日本側から要求させるのが適当として、大久保武雄海上保安庁長官に協議した。大久保長官は具体的にどうしたらよいかアイデアが全くなくて躊躇した。バークさんは彼の訪問すべき官憲のリストとそのおのおのへの説得力ある手紙を渡して道を敷き、さらにバーク夫人に彼の訪問すべきオフィスを案内するよう手配した。51年1月渡米した大久保

長官は、彼の求めたフリゲートの貸与、浮流機雷捜索用航空機の保有と使用等すべての目的を果たして帰国した。

これに先立ち50年10月、ジョイ中將からフリゲート10隻を貸与しても良いという話を聞いた野村さんは、海軍再建を研究している有志や復員局の職員と連絡してこの問題を検討、翌年1月ジョイ中將を訪ねて海軍再建案を示し希望を述べた。その結果、バークさんと保科善四郎中將が再度この問題を話し合うことになり、バークさんの適切な助言に基づいて修正した再建案は、講和条約調整のため来日中のダレス特使を含む内外の要人に配られ、またバークさんの報告に接したCNOは、日本政府がこの案に同意であれば、米海軍はこの案で進めるのに異存はないと示してきた。保科さんはバークさんからその旨を聞いて日本政府の意向を打診したが、同意が得られず、この件はご破算になったという。

海上警備隊が創設され、PF等が保管の名目で要員訓練に使用されるようになったのは、バークさんが51年5月に転出した約一年後であったが、(正式貸与の協定は52年11月調印)その基盤を築いた一人はバークさんであり、特にその当時に培われた日米両海軍間の緊密な関係と相互信頼は、さらに発展しつつ今日に及んでいる。

バークさんは、その後も海上自衛隊に対する何よりの理解者であり、支援者であった。やがてCNOに就任したバークさんが、域外調達を適用して「あきづき」「てるづき」二隻の護衛艦を日本で建造し、その命数が尽きるまで海上自衛隊に貸与して長く護衛艦隊や練習艦隊の主力になったこと、あるいは当時の最新鋭対潜哨戒機P2V-7 16機、S2F 60機を無償供与し、且つP2V-7の国産化を可能にして海上航空部隊を戦力化したことは、彼の支援の一端であった。勿論これらは、米国の国益に沿い、米海軍の方針に合致するものであったろうが、バークさんの海上自衛隊に対する厚意と信頼なくしてはあり得なかったであろう。これらは顕著な例であるが、このほか物心両面において幾多の厚意と支援を頂いてきたのである。

ついでに個人的なことになって恐縮であるが、私自身のバークさんに対する気持ちを紹介しておこう。私が今までの人生において、上司や友人、部下のように直接関係のあった人々は別にして、ほんの一二度接しただけで心から感銘し、修練の目標にしたいと思った人が二人いる。一人は、山梨勝之進先生、もう一人はバークさんである。バークさんには短い時間であったが、二度個人的に会う機会に恵まれた。

最初の機会は、1960年 WAR COLLEG に留学中、ワシントン見学の行事があり、当時CNOであったバークさんに学生が挨拶した。この外国人課程の創設もバークさんの功績の一つで、各国海軍間の緊密な関係を確立するのに大きな意義を持ったものであった。私どものクラスは23カ国から一人ずつの学生がきていたが、バークさんはその学生一人一人と握手し、二三分ながらそれぞれの国に誠にピッタリしたしかも温かい言葉をかけられた。これにはすっかり感銘し、さすが大海軍のCNOだと思ったことであった。(バークさんの海上自衛隊に対する貢献を知ったのは、帰国後であった)

次は1976年私が海幕長のとき、米海軍200年の記念行事に招かれてお会いした。当時は、田中角栄首相のロッキード事件のとばっちりを受けて、次期対潜機の機種決定が遅れ、このままでは主力対潜機に大きな穴の空くことに焦慮しており、渡米したのも、政治的に可能になり次第P3C最新タイプのリリースを受けられるよう、内密に調整したいと思ったからでもあった。日本大使館でのパーティに出席されたバークさんは、勿論具体的な問題に触れるわけではなかったが、先輩の後輩に対する態度というよりは、むしろあたかも慈父が愛児をいたわり励ますような感じで、責任者は何時の時代でも、一人で悩み決断しなければならぬものであることを、温かく話され、恰も全人格の迸りを有り難く頂いた思いであった。私は話の内容もさることながら、親身になって激

励されるその気持ちの熱さに、本当に感動し、これだけの人柄を作り上げた背景を知りたいと思ったことである。

そのバークさんの人柄について、彼が亡くなった直後NIPの1996年2月号に載った追悼文では、極めて謙虚で、努力によって天性の資質を極度まで高めたことを強調し、簡潔で要点を得たコメント、腹の底からの笑いと豊かなSAILORのユーモア、雅量があり偏見のない精神、素晴らしい歴史のセンス等を特色として挙げている。

これらはいずれも首肯されることであるが、今日は時間の関係もあり、先ず彼の任務に対する態度、海上自衛隊の言葉で有事即応に関連することについて触れ、次いで彼が墓にもSAILORの墓とだけ書くように遺言したといわれるように、終生SAILORを以て任じていた、これも今日の言葉では現場第一ということであらうか、この二つを話した後時間があれば、彼の自らを磨く努力や部下への委任に及びたいと思う。

バークさんの実戦経験は、1943年2月から44年3月までのソロモン方面での戦闘、44年3月から45年5月までのパラオ攻撃からマリアナ、フィリピン、硫黄島攻略を経て沖縄攻略までの全空母作戦、50年9月から51年11月までの朝鮮戦争(51年7月から11月までは休戦会談委員)ということになる。

彼自身が、自分は例外的な人物ではなくて、多くのハードワークと少しの幸運の結果として、今日あるGOOD NAVAL OFFICERに過ぎないと言うように、幸運であったことは事実である。彼のソロモン方面の戦闘は、まさに日本の少数精鋭が破綻しアメリカのレーダが有効に活用されるようになった時期と合致し、それより早ければ日本側にやられ、遅ければ名を為す機会は無かったであろう。彼の31ノットバークという呼び名は、戦争英雄として一生良い意味でついて回ったが、それもハルゼー不在中にその名で出された命令が、ハルゼーの名声と戦争英雄を求める時流に合致して、新聞記者が31ノットバークという見出しで、バークを有能で猛烈な勢いの駆逐艦乗りとして描き、それが大きく喧伝されたという偶然の所産であった。高速空母も、彼が着任した頃ようやく数も揃い全面的活動に入ったところで、最も良い時期に、専門外として期待もできない良い配置に就いたといえよう。しかしいずれの場合も、それを活かしたのは、バークさん自身の人並み外れた非常な努力であった。

31ノットバークの名を得た43年11月24日の戦闘(米側では、BATTLE OF CAPE ST GEORGE という)は、ブカ島に増援を送る日本側5隻の駆逐艦と、その通信を傍受した司令部から急速進出してこれを撃滅するよう命じられたバークさん指揮下の5隻の駆逐艦との間で戦われたもので、米側は全くの奇襲に成功し、日本側「大波」、「巻波」、「夕霧」の3隻が沈没、米側は魚雷の命中した1隻も不発のため被害なしの完勝であった。この成功を得るまでのバークさんの経験と工夫の一端を紹介しておこう

バークさんの初陣は、COM DESDIV 43として、1943年3月のコロンバンガラ砲撃であった。彼の乗艦は巡洋艦戦隊の警戒艦として6000ヤード前方に進出、レーダー員が敵艦探知を報告したが、彼はこれを信頼せず確認に時間をとり、魚雷発射を令したのは巡洋艦が砲撃を開始したのと殆ど同時となった。この雷撃と砲撃により、駆逐艦2隻(「村雨」、「峰雲」)を撃沈、続いて飛行場の砲撃も行って米艦隊は無傷で帰投した。作戦としては成功したが、彼は自らに深く不満で、良く訓練されたレーダー員を信頼しておれば、巡洋艦の存在と位置を暴露しないで、敵艦を沈めることが出来たはず、今後は訓練された部下の報告を受容して、それに基づき即座に行動すること、それが出来るように部下を訓練すること、を固く決意した。部下の若い士官に、GOOD OFFICERとPOOR ONEとの差は、約10秒だとよく教えたのも、この経験によるものである。

その後中部ソロモンへの増援補給や陸上砲撃、あるいはガ島への輸送護衛等の作戦に忙しく活動しながら、それまで米軍の弱点であった夜戦の戦訓を深く研究し、当時開発されたCICを活用して、互いに支援する二つのDESDIVの戦闘法や巡洋艦を支援する駆逐艦の用法等、新しい戦術を編み出した。そして上司を補佐して巡洋艦、駆逐艦の夜戦能力を基礎から教育し訓練して、練度の向上と戦術の徹底及びその改善を図った。ボーゲンビルへの上陸作戦では、COM DESRON 23として、11月2日日本軍の反撃を阻止する部隊に加わり、「川内」を撃沈したが、レーダーの具合が悪く味方を追跡したり、味方同士が衝突したりの失敗もあった。これも良い反省と改善の資となった。これらが実ったのが24日の戦闘であったのである。

個人的な感慨であるが、「大波」で戦死された吉川艦長は、私の仕えた名艦長で、1年前「夕立」艦長として第三次ソロモン海戦で殊勲をたてられた方であり、その前任将校は私のクラスメートで、1年前は「夕立」の乗員を救助した「五月雨」の砲術長であった。先に沈められた「村雨」には当時の司令であった橋大佐が乗艦しており、「峰雲」の前任将校は私のクラスメートであった。誠に痛恨に耐えず、複雑な感情に襲われるのである。第三次ソロモン海戦の頃は、敵がレーダーを使っていることは既に知っていたが、我が見張り術力の方が優れているとの自信を持っていた。しかし1年の間にすっかり状況は変わってしまった。

2年前の開戦時、私のクラスは、中尉になったばかりで、駆逐艦では最後任の科長であった。私の前任者は9年先輩の高等科学生を終わった人で、その後兵学校も短縮教育で、雷撃法も発射法もカットされた私が水雷長になったのだから、艦長が不安を持ったのも当然である。私は必死で勉強し自らを訓練したが、部下の方は永年の艦隊訓練で鍛えられたベテラン揃いで、私が自分のやることさえしっかり出来れば、戦力発揮に支障はなかった。それが2年後には、私のクラスが前任将校になり、しかも新しく就役した「大波」の乗員充足ではベテランは既に枯渇し、新人が多かったものと思われ、艦長がいかに優れていても、1年足らずの間に、任務を遂行しつつ部下を訓練して、精強の域に達するのは不可能であったろう。確かに開戦直前の連合艦隊の術力は、何処にもひけを取らない最高の域に達し、名人、達人も多かったが、それには代わりはなく、被害を受け人が消耗するにしたがって術力は急速に低下した。金のない日本海軍は少数精鋭に徹せざるを得ず、長期戦になってそれが破綻したのに対し、米海軍は、名人や百点を望まないが、誰でも合格点はとらせる大量養成に成功した。敗戦の原因は、物量の差だけではないのである。

つい横道に入ったが、話しを元に戻そう。この当時のバークさんについて、当時彼の部下の一人で後にVADMになったR. P. PEET少尉は次のように書いている。

1942年私は任官した直後フレッチャー級駆逐艦のCONVERSE (DD509) 乗組を命じられ、戦闘任務に備えた厳しい訓練の後1943年5月南太平洋に到着した。吾々の到着直後当時大佐であったアーレーバークが現場に現れた。吾々は彼について多くのことを聞いていた。攻撃精神旺盛で、誠実、外向的、反応が早く、熱心に何かをしようとするなどである。彼はやがて新しい2100トン駆逐艦からなるDESRON 23を編成した。SQには8隻の艦があり、CONVERSEはSQの第2DIV であるDESDIV 46の司令駆逐艦となるが多かった。その司令AUSTIN中佐が、組織を重視し慎重であったのに対し、バーク大佐の方は対照的に決断が極めて早く可能な最善のものを持つて第一番に現場に駆けつけるといった人であった。このリーダーの奇妙な取り合わせが却って成功したといえよう。

吾々はバーク大佐の指揮下ソロモンのSLOTを往復するのを常とした。彼はすべての艦にチームの一員であると感じさせるようあらゆることをした。大砲は確実に一直線になっていなければなら

ず、すべてのことが競争であった。吾々はCALIBRATION射撃を行い、高速でスマートに運動し、信号には迅速に応答した。彼は戦闘ドクトリンを發布した。それは極めて単純で次の基本に基づいていた。

日本人を殺すのに役立つことは重要であり、役立たないなら重要ではない、

戦闘に備えて、常に訓練を続けよ

戦闘に備えて、常に装備を即応状態にせよ

戦闘即応の状態について、常に上級指揮官に報告せよ

訓練は厳しく、すべてのものがまさに時間通りに進められ、スマートに信号に応じることが期待された。このチームの一員であることは、大きなスリルであった。SQはバーク大佐とともに地獄の果てまでも行ったであろう。もし彼が吾々を日本に連れていくというのであれば、吾々すべてが共に行く用意が出来ていた。彼はこういうタイプのリーダーであった。

吾々は、夜間SLOTを高速で航行したが、それは常に危険な仕事であった。吾々はバージや外の小舟艇を撃ち敵の海上交通を遮断した。度々陸上砲撃を行い、CONVERSEは5インチ砲の内臍が摩耗し換装せねばならなかった。吾々は暗夜を好んだ。吾々には、レーダーの有利さがあったからである。我が情報は大変良く、吾々はそれを知り、信頼した。

あるとき給油中重要な無線のメッセージを受けた。誰もが入電するメッセージに関心があった。乗員すべてがどうなっているか知りたい強い望みを持つものだ。吾々はバーク大佐がボーゲンビルに向かう敵軍についてのメッセージを受けたことを知った。(中略)戦闘に赴く途中吾々は興奮していた。敵部隊を遮断しようとする正確な時間はおおむね分かっていた。果たして計画通り正子過ぎ吾々は敵部隊を発見した。オースチンはバークのとる戦術を良く理解しており、吾々は正確に何を為すべきかを知っていた。吾々は攻撃のため前進し、魚雷を発射し、射撃を開始した。吾々は成功し多くの戦果を挙げたが、CONVERSEには艦の真ん中に魚雷が命中した。それはドスンと艦にあたり、吾々は一時的に全動力を失ったが、幸いにも不発であった。(中略)

DESRON 23は本当に向こう見ずの部隊であった。吾々は何処にでも行った。吾々は高速であった。そのことはSQ各艦の士官や兵員にとって重要なことであった。彼らは危険を恐れない消防士の一団であることを知っていた。彼らは良いチームであり、お互いに守ることが出来、正確に射撃が出来、ダメコンチームは優秀であることを知っていた。これらすべては、バーク大佐の計画の一部であった。

以上がPEET少尉(当時)の回想である。

次にバークさん自身が、上級指揮官であったハルゼーの思い出を語った中に、当時の状況がよく出ておるところがあり、両者の指揮官としてのあり方も興味深いので、これも紹介しておこう。

(前略)私は、DESDIV 43の司令として、ハルゼーの麾下に加わった。私の隊は厳しい戦闘を行いつつあり、十分な整備が出来なくて、耐え難い状況にあった。何処も彼処もガタガタになっていた。私は何回もハルゼーの司令部に手紙を書いて、必要なものが何も得られないと強く訴え続けていた。(中略)吾々の艦は戦闘によって被害を受け、ますます有効性を減じた。もっと悪いことに戦闘に疲れた乗員にはビールも無く、リクリエーションは皆無であった。士気は必然的に沈滞した。

私は修理のため部下のある艦をシドニーに送る命令を書き、ハルゼーには出発しつつあると電報した。すぐにソロモンに留めるようにとの返事が来た。それは二度繰り返された。「SAUFLEY」の缶の一つがあまりにもひどい状況にあったので、私はハルゼーに黙ったままシドニーに派遣す

る決心をした。また吾々はSQの金をかき集め艦長に渡して、艦の缶を修理している間にウイスキーとビールを買うよう頼んだ。「SAUFLEY」が航程の半分を過ぎた後で、私はハルゼーにやったことを報告した。その反応は予期していたとおりで、私が彼の旗艦が停泊しているヌーメア付近に来る最も早い機会に、ハルゼーを訪問するようにとのメッセージがまもなく届いた。私はそれが意味するところを知り、直ちに出向いた。

私が彼の事務室に入ったとき、彼はドアに背中を持たせて椅子に座り隔壁を睨み付けていた。永遠と思われる時間の後彼は向きを変えて私を一瞥した。”おお、バーク”彼は言って、机の上のなぐり書きのノートを見下ろし、”SAUFLEY”とつぶやいた。突然彼は真っ直ぐ向き直って私を凝視した。「一体全体どういうわけで、自分でSAUFLEYをシドニーに派遣するというをやったのか」私は自分の全経歴が此の返事にかかっていることを知っていた。”SIR”私は始めた。「私の部下は何ヶ月もの間ビールもウイスキーも全く無しでした」「何だって」とハルゼーは恰も信じられないというように頭を振りながら、口を出した。「君はあの艦を酒のために出したのか」私はまさにSAUFLEYの缶についての悲しい話をするとところだったが、何か一それは彼の面上にあったものに相違ない一が私を引き留めた。

「YES SIR、艦長は大量のアルコール飲料を搭載しました」私は再び始めた。ハルゼーの顔は寛いだ。「よろしい、バーク」彼は言った。「君の勝ちだ。君の部下は立派な仕事をやってくれている。私は、君が彼らのために、退引きならぬ危険な羽目に陥ったからといって、咎めることは出来ない。しかし、それをもう一回やるなよ」彼は節くれだった褐色の指を私に向けた。「もし君が修理のためにSAUFLEYを派遣したと言ったら、君を処罰したところだった」

これが、この世の何処へでも、地獄にさえも、ADM. HALSEYについていこうと思ったときのことである。(下略)

次にバークさんが1944年3月27日、グリーン島北方で第5艦隊と会合し、ハイラインで「レキシントン」に着任したときのことに話を移そう。空母を含む部隊の指揮官が水上出身のときには、航空出身の参謀長を、指揮官が航空出身のときには水上出身の参謀長をおくことに決定され、バークさんの転勤もこの方針に基づく人事異動の一環であった。バークさん自身は、駆逐隊の指揮にすっかり満足していたうえ、本国で一月の休暇の後新しいDD 1SQの指揮を与えられ太平洋に持ってくる内々の話しを聞いていたこともあり、突然変わったこの転勤に大変不満であった。一方COM CARDIV 3で、かつCTF58として高速空母機動部隊を指揮しているVADM MITCHERも、この方針に全く不満で、現在の参謀長に満足していた彼は、水上出身などには興味が無く、命令なら仕方がないとして参謀長のHEDDING大佐に人選を委ね、彼が人事局から言ってきた候補者の中から、かつてPGコースで一緒であったバークさんを選んだのであった。

「レキシントン」に乗艦したバークさんは、ヘディングの紹介で、司令部艦橋左舷張りだし後ろ向きのキャンバス椅子という定位置にいるミッチャーに着任を報告、両者とも心にもない儀礼的な挨拶を交換した。ミッチャーは田舎の雑貨店のオヤジを思わせる痩せた小男で、冷たく且つ厳しく凝視し、話は穏やかだが呟きを大きく出ない小声で、バークさんは即座に嫌悪を感じた。ヘディングはCOM CARDIV 4の参謀長が急死したための臨時勤務にすぐ出発、バークさんは30分で準備を整え司令部艦橋に戻り指示を待った。ミッチャーは傍にいるバークさんに一言も声をかけず、無視されたと思ったバークさんは艦橋の中に入り、当直幕僚と話し、ORDERを読み、艦橋の装備を調べ、搭載機等に関する出版物を取り寄せ、勉強を始めた。続いて次の何日か、命令、信号、指示、航空作戦マニュアル、その他同情した幕僚が役に立つと考えたすべてを吸収することに集中した。

TF58は78隻から成り、三つの大きな円形陣形を作って、パラオに向かっていた。28日の夜日本の夜間攻撃が行われた。攻撃間バークさんは、THIS IS BOLD EAGLEで始まる VOICE RADIO の命令を数回聞いた。それはミッチャーが自ら電話を掴んで下したものであり、ミッチャーが自分の参謀長としても行動していることを示していた。バークさんは自分が全く不適任であると感じ、外の配置をさらに激しく熱望した。29日バークさんは司令部艦橋で、日本の雷撃機が向首し接近してくるのを見た。電話の命令もなく視覚信号も示されなかった。誰かが回避を命じなければならぬと感じて、彼は電話を取り、BOLD EAGLEの名で、必要と考える命令を与えた。攻撃が終わったときバークさんは、雷撃機回避はTF58にとっては標準的行動で、特別の命令は不要であることに気が付いた。命令は最小限度に留めるのがミッチャーの方針であった。彼はミッチャーの前に行き厳しい叱責を予期して気を付けの姿勢をとった。ミッチャーは彼を見下ろし一呼吸置いて、「あれは大体良いタイミングだった」と言った。痛烈な皮肉と思ったバークさんは、心臓まで刺激を受けたという。バークさんが皮肉と思ったこの”IT WAS ABOUT TIME”という言葉には、悪戯好きのミッチャーが冷やかしたのではないかという見方や、バークさんの当惑を面白がるとともに、乗艦3日後に電話を掴んで大部隊に命令を下す彼の根性に、印象づけられたという見方もあることを紹介しておこう。

30日TF58は予定位置に着きパラオの攻撃を行った。「レキシントン」の前任飛行隊長は、予め命令されていたとおり、帰艦後直ぐに状況を詳しくミッチャーに報告した。一緒に聞いたバークさんは、ミッチャーが搭乗員たちから自分の必要とする情報をいかに早くかつ機敏に引き出すか、そして彼の与える助言や指示がいかに適切で簡明であるかに印象づけられた。バークさんは、この大空母部隊を指揮しているのは、決してけばけばしいやり方ではないが、結局小柄なミッチャーであること、また彼が口を開くことなく単に一瞥するだけで命令を与える稀な士官だ、と聞いていた評判の正しいことを理解し始めた。

バークさんは、次の数ヶ月搭乗員たちとともに働くのであれば、彼らと戦闘経験を分かち合うべきだと考えた。その時機雷敷設機がデッキのうえに認められた。彼は急いで下に降り、隊長を捜し任務に連れて行くよう頼んだ。隊長は自分にその権限があるか疑問に思っミッチャーに相談、ミッチャーはバークさんに何故行きたいか尋ねた。バークさんは、「自分は航空戦について何も知らず、艦の中で他人の話聞いても感じが掴めない、その感じを得るため」と答え、ミッチャーは不断より多少厳しさの減った表情で許可した。搭乗機は無事任務を終え、バークさんは、敵の防空砲火の中、編隊を組んで、一定のコースを低空低速で飛ばなければならない敷設任務に対する搭乗員の抵抗が良く理解できた。

バークさんは着任翌日黎明一時間前に起きて司令部艦橋に行ったが、ミッチャーはもう来ていた。彼の来る前に艦橋に居て、彼が去るまで残るべきだと判断したバークさんは、黎明一時間半ないし二時間前に起き、総ての作戦や飛行作業が終わってミッチャーが去った後艦橋を降りることにした。すべての仕事は、艦橋または司令部作戦室で行い、艦橋近くの狭いSEA CABINで休み、当直幕僚に司令官を呼ぶときにはその前に参謀長に知らせるルールを守らせた。このようにバークさんが勤務に精励したにも拘わらず、ミッチャーは依然冷たく、必要やむを得ないとき以外口を利かなかつた。毎朝バークさんが出来る限りの快活さで挨拶しても、返ってくるのは口の中のおつぷつだけで、氷は溶けなかった。

4月6日TF58はメジュロ環礁に帰投、幕僚は次の作戦であるマッカーサーのホランジア侵攻支援の計画を立案し始め、ヘディング大佐も帰艦した。バークさんは、ヘディングに、ミッチャーの冷遇は自分に早く次の配置を求めさせるため、自分もこれ以上長く我慢しようとは思わない旨話した。ヘディングは、バークさんがミッチャーの無口を意地悪と誤解していると断言し、「彼は

確かに飛行機乗りでないものを参謀長にすることに不快を感じたが、基本的には親切で思いやりがあり、選抜のうえ任命された人にその恨みをぶっつけるような指揮官ではない。とっつきは悪くはじめは理解するのが難しいが、GREAT MANである」と保証した。バークさんは、熟考した後もう少し我慢することに同意し、ヘディングは暫く参謀副長としてバークさんを補佐することになった。

4月13日TF58はメジュロ発ホランジアに向かった。ホランジアの沖で揚陸侵攻を行う7Fが会議を招集し、ミッチャーはバークさんに自分の代理として出席を命じた。前日バークさんはヘディングの助言で飛行隊長の後席で現地を偵察した。上空に敵機はなく、所在の日本軍は僅かで、ホランジア付近には陣地も見えず、大した抵抗は予期されなかった。見過ごすものがないようバークさんは隊長にもっと高度を下げるよう要請し、主上陸海岸に近い飛行場のうえを低空で飛んだが抵抗は何もなかった。隊長が着陸を提案、バークさんの同意でタッチダウンを行い、離陸上昇中砲撃を受け命中した。隊長があればバカげたことだったと言い、バークさんも同感した。命中弾により舵のコントロールが損なわれ、隊長はバークさんに不時着水の指示を与えるとともに母艦にその旨を報告したが、危機一髪で辛うじて着艦した。ミッチャーはすべてを見守り、バークさんをからかって当分の間飛行禁止を命じ、必要な情報を入手したかを確かめて、翌日駆逐艦で会議に出席するよう手配した。

4月21日ホランジアの揚陸が行われ、抵抗は微弱でTF58の支援は不要となり、メジュロに帰投することになった。ミッチャーはトラックを再度攻撃することを決心、サタワン(モートロック)とポナペも攻撃することになり、幕僚は計画に多忙となった。バークさんは、新しい高速の戦艦や巡洋艦の乗員に、対空火力で空母を守るだけでなく、重装備を有効に発揮する機会を与えて、士を高揚することを考え、サタワンとポナペでは砲撃部隊を先に出し航空支援を最少にするIDEAを進言、ミッチャーも承認して実行された。これらの攻撃後TF58主力は5月4日メジュロに帰投したが、この頃にはミッチャーとバークさんの関係は幾分好転した。バークさんは、ミッチャーが作戦をコントロールしあるいは計画を論じるのを観察すればするほど、彼が作戦特に航空作戦に精通していることにすっかり敬服するとともに彼に対しある程度温かい気持ちを持ち始め、ミッチャーもバークさんを信頼し始めたのであった。

こうして始まった両者の関係は、厳しい実戦の坩堝の中ですっかり融合され、バークさんはマリアナ作戦が終わる頃から「厳しい無口なこの偏ったボスに、今までの上司の誰よりも愛着を感じるようになった」。そして沖縄作戦後DCNO FOR AIRになったミッチャーが、そのDEPUTYとしてバークさんを望み、搭乗員でないとして断ったバークさんに、出来るだけ早く海上勤務に出るようにするからその時には一緒に来て貰いたいと約束し、1946年3月には第8艦隊、同年9月には大西洋艦隊で、その約束を実現する域にまで至ったのである、47年2月にミッチャーが病死した際には、バークさんが公私にわたり一切の後始末を取り仕切った。ずっと後にバークさんはミッチャーを回想して「彼は、WISE, SIMPLE, DIRECTで、且つ厳しく冷酷でもあった。誰も彼を喜ばせ、彼の承認を得ようと望んだ」と述べている。

飛び過ぎた話を元に戻そう。この後ミッチャーとバークさんのコンビは、マリアナからフィリピン、硫黄島、沖縄と米軍反攻の中心となる全空母作戦を計画指揮した。計画作業にあたり、ミッチャーは先ず幕僚会議を招集、例えばマリアナ作戦のときには奇襲、急襲、敵の孤立化を重視し、これらを最も有利に達成するような計画の準備を望む旨を話して退席、後はバークさんが主催して注意深く幕僚の意見と示唆を聞いた。幕僚の大部分は空母作戦についてはバークさんより良く知っていたが、何が働き何が働かないかということについての直覚は、バークさんが大いに頼りになることを全員が間もなく認めるようになった。計画の文書化にあたっては、バークさんは、複雑で

重複が多く、自分の関係以外は読まれないという従来の弊害是正を決意し、明瞭、単純、簡潔を旨とし、部下指揮官への委任を重視するとともに標準PROCEDUREを活用することに努めた。計画作成の間パークさんは適宜の間隔を置いて、ミッチャーに計画の要点や問題点等について報告し、迅速に回答を得るのが常であった。計画が完成し決裁のためミッチャーに提出されると、彼は一語も読まないで決裁した。あつけにとられたパークさんに、彼は文書には興味も関心もなく、自分が知る必要のあることはすべて話してくれたと信頼するので読む必要はないと語った。計画作業の間もう一つ重要なことは、上級司令部及び下級司令部との意志疎通であった。パークさんは、麾下の4群の司令部を訪ね、指揮官に目標や狙いをよく説明するとともに要望を聞いた。その間、各指揮官の長所や短所を知るとともに、それぞれの指揮官が最大の成果を上げるよう鼓舞激励するにはどんな方法がよいかを感得した。

ミッチャーの高速空母機動部隊は、ロテーションによりスプルーアンスまたはハルゼーの指揮を受け、TF58またはTF38となったが、何処まで上級指揮官が握り、何が任されるかは、重要且つ微妙な問題であった。ミッチャーとスプルーアンスあるいはハルゼーとの関係その間にパークさんの果たした役割なども興味が深いが時間の関係もあるので省略する。

1945年4月沖縄侵攻に際し、日本軍は大和の水上特攻を初め、神風特攻を主とする菊水作戦を連続して、必死に戦ったので、米軍にとっても厳しい戦いとなった。ミッチャーの空母機は、大和隊や九州等の攻撃を行った以外は、TF58の防空及び沖縄攻略の支援に極めて多忙であった。ミッチャーは被害の予防に全力を尽くし、敵の大きな攻撃を予期したときは沖縄の支援を中断してCAPを強化するとともに、急降下爆撃機や雷撃機の武装をはずして燃料を抜きハンガーデッキにパークさせるなど火災や二次的爆発を最少に押さえる措置をとった。日本の絶え間のない攻撃は、TF58の乗員特に指揮官に休む間のない緊張を強いた。総員配置は数えられない程頻繁で、夜二三時間しか寝られないことも続いた。戦闘疲労と呼ばれる精神異常を来し、病室に入れられるものも出た。パークさんは、夫人に「夜20回起こされた挙げ句0330に起床するのが当たり前となった」と書いている。2月10日にウルシーを出撃して以来硫黄島作戦に続く沖縄作戦で、殆ど連続的に戦闘を行いながら90日の間海上にあり、その間ウルシーで短く忙しい休養が一回あっただけという状況のもと、ミッチャー司令部の人々の顔つきも変わった。すぼめた唇、落ちくぼんだ目、目のしたもたるんだ。ミッチャーの体重は100ポンドを割り、同じデッキは移動できても、デッキを上下することは無理になり、パークさんが持ち上げたり降ろしたりした。軍医の主張で、朝はゆっくり起き出来るだけ私室で休養をとるようにした。それでも頭は少しも変わらず、パークさんはいつものようにミッチャーの代弁者として、その望むことの実行を命じ、疑問のあるものは、静かにミッチャーと相談した、各TGには定期的にウルシーに下がり、10日間の休養をとるロテーションがあったが、スプルーアンス、ミッチャー、ターナー(両用部隊指揮官)は、現地にとどまった。

5月11日ミッチャーの旗艦「BUNKERHILL」は、神風2機の攻撃により大きな被害を受け(戦死396名)司令部員の少なくとも半数は戦死し、助かっても火傷や重傷を受けたものが多かった。パークさんは自ら煙の中から電信員を救出した後、司令部員や司令部施設の被害を調査し、ミッチャーに報告した。「BUNKERHILL」がもはや旗艦としての機能を果たし得ないことが明らかになって、パークさんは駆逐艦に司令部を移乗させ、ついで翌朝「ENTERPRISE」に将旗を掲揚、指揮を復旧した。同夜、2個TGをもって、九州及び四国の航空基地を攻撃するために北上、この夜スプルーアンスは旗艦「NEW MEXICO」に命中した神風によって危うく戦死するところであった。5月14日攻撃を終え沖縄東方の通常の作戦海域に帰る途中「ENTERPRISE」に神風1

機命中、空母としての機能を失ったので、ミッチャーと残った司令部員は翌日「RANDOLF」に移った。この時には幕僚当直にたった経験のあるものは2人しか残っていなかった。ニミッツは4月末沖縄を視察し、各指揮官が間もなく耐久力の限界に達するものと認め、グアムに戻った後、ハルゼーに沖縄の占領が終わると否とに拘わらず、30日以内にスプルーアンスと交代させることを告げていた。5月28日、ミッチャーはマッケインと交代、これでバークさんの空母機動部隊の戦闘経験は終わった。

朝鮮戦争での経験も興味があるが、時間もないので省略する。

以上述べた実戦経験が、バークさんの血肉となっていたことは次の彼のコメントに良く現れている。これは彼が1983年、講演を行った際、「提督は、海軍の最新艦、例えばTICONDEROGA級巡洋艦、SPRUANCE級駆逐艦、OLIVER HAZARD PERRY級フリゲート艦をどう思いますか」という質問に触発されたものである。やや長いが、彼の考えを良く表しており、皆さんにも学んで欲しいと思うので、ここに引用する。

まだHOLLOWAY大將が、CNOであった4、5年前、私は親友のCARNEY提督(注:カーネーはバークさんの前任CNO)とともに度々彼を質問攻めにした。そこでハロウエイ提督は「貴方方は一体何について話をしているかお分かりになっていない。貴方方は新しい装備に通じていない。エレクトロニクスもガスタービンも御承知でない。新しい航空機には勿論貴方方の知らない沢山のことがある。是非現場に行き実際に見るべきだ」と言い、吾々は”FINE、海上に行こう”と同意した。

こうして彼は、吾々に艦隊を見る許可を与えた。(中略)吾々は第一級の駆逐艦である「CARON」(DD970)に乗って海上に出た。この艦は竣工したばかりの新造艦であったが、十分にテストされており、今までの駆逐艦の中で最高の公試成績を収めていたことを、後になって知った。勿論そのことが、吾々をこの艦に乗せた理由であった。

吾々は前日の夕方ノーフォークに行き、大西洋艦隊司令官やすべての専門家からブリーフィングを受け、翌日何をするかのスケジュールも示された。吾々は、このスケジュールは結構だと思うが、ほんの少し変更してもらえないかと頼み、望み通りにごく僅か内容を変えることになった。また、吾々が老人のくせにいろいろのところに入り込みそうに思ったのであろう、怪我をしないため、オペレーションの現場から離れていて欲しいと要望された。

当日、先ずASW OPERATIONの展示が行われた。吾々は「CARON」の艦橋にとどまるよう要請された。「AINSWORTH」(FF1090)を「CARON」の舷側に呼び、そのヘリコプターを使ってASWを行う計画であった。彼らは何処よりも「CARON」の艦橋が訓練を見るのに最も良い場所だと言った。FINE、FINE、たった一つ残念だったのは「AINSWORTH」が舷側に近づこうとしたとき洋上で動かなくなったことである。この艦は数時間後も一軸しかない機関の故障が復旧せず、まだ動いていなかった。

それから吾々は、「CARON」唯一の大砲装備である艦首の5インチRAPID FIREの射撃を見ることになった。彼らはその砲が発射する毎分ごとの弾数を述べ、いかに発射速度が早いかを説明した。それに対し吾々は、「FINE、発射速度は重要だ。しかし実際にものをいうのは命中弾数だよ」と言った。この射撃は前夜吾々がほんの少し変えてもらった訓練の一つであった。彼らは高速で右舷艦首を目標に向けて近接し、右に一杯舵を取って射撃を開始し、目標が完全に左舷に変わるまで射撃を続け、この種の装備がいかにうまく高速旋回に追従するかを、吾々に示そうとしていたのである。吾々は当初の計画より、もっと目標に近接し距離をつめてから旋回を開始して射撃を始めるよう示唆した。その示唆に従って射撃は行われた。ところが「CARON」が高速旋回

を初めて間もなく発砲は途絶えた。艦首構造物をうたないための射界制限に入ったため自動的に射撃は中止されたのである。この中止の間発砲を継続するために出来ることは何もなかった。勿論乗員は、近距離でこのようなことが起こるのを知っていた。艦隊司令部では、艦の戦闘性能を展示しようとして、このような特殊の運動が戦闘有効性を示すものではないことを忘れたのであろう。

私がこのような小さい例を話すのは、予めプログラムしたことが、時として戦闘では十分でないことを強調するためである。質問のあった近代的な艦がうまくやれるかやれないか、誰にも分からない。実際に戦闘を行うまでは本当に分からないのだ。諸君現役の人が、確実にしておかなければならない一つのことは、諸君の装備がいつでも正しく働くようにしておくことである。それはどんなときでも働かなければならない。人々は戦闘で興奮する、人々は間違いを犯す。そしてその間違いは最初の戦闘の緊張時に起こり易いものである。人間は間違いを起こすものであり、その誤りは自動的に直されなければならない。コンピューター以前の古い時代には、その矯正は乗員の中の他の人が行った。誰かが間違いを起こし、何かがうまく行かぬ時には、他の人が介入し修正しなければならなかった。初陣に臨んですべてうまくやっただと感じつつ戦闘を終えた人を、私はあまり知らない。うまくやれなかったことを、彼らは気付く。2、3回はこういうことが起こる。しばらくの後間違いを繰り返さないようになり、うまくやったと思うようになるものである。

さてこの長広舌の基礎にある私の信念は、戦闘は主として人間により行われ、いかにうまく彼らが機能を果たすかによって勝つことが出来るものだという事である。もし何が起こるかを正確に予想でき、それを正確にプログラムしてコンピューターに入れ、これがまさに敵がやろうとしていることだと言うことが出来るなら――私の場合決して敵はそうしなかった――良い結果を得るであろう。

コンピューターは人間の判断よりずっと正確だ。プログラムは細部まで働く。もしこれをチェックし再チェックするなら、非常によいプログラムが生まれ、どんな人間が自分でやるより良いものとなるはずだ。しかしこれらのシステムは、予め正確に何が起こるかを予測できたときのみ働くのである。

現代の現役軍人は、50年前の自分たちより熟練し、より良い技術的教育を受け、教育訓練により多くの時間を費やしている。勿論自分の専門分野を選んだ後は、それに集中しなければならない。義務に対する献身――君たち全員が持っていると思う――が要求され、他の活動のために残される時間はないはずである。また高度の技術的装備は、多くの専門的テクニシャンによる周到な保守整備を必要とし、その為には資格を持った多数の技術的エキスパートがいなければならない、もしそうでなければ装備は適切に働かない。海軍に一身を捧げたこれらエキスパートたちこそ、海軍を支えているのである。

もう一つ別の海の話をしておきたい。戦後私は好敵手であった草鹿提督と非常に良い友人になった。彼はラポール所在の日本海軍の指揮官であった。私は日本に行ったとき数回彼を訪ねた。彼は英語を話さなかったが、良く英語を読み理解していた。CAPT. 玉川(今まで持った副官のなかで最良の一人)が何時も通訳してくれた。昼食に出かけ食事を済ませた後、彼はチャート、写真、彼の戦闘報告等すべての資料を広げた。彼は格別に当時の戦闘を研究しており、私自身よりも彼の方が私が何をしていたかを知っていた。私の覚えていないことも、彼は良く研究して知っていた。

あるとき彼は言った。「ADMIRAL、何故貴方は自分自身のドクトリンを守らなかったのか」そこで私は答えた「貴方が駆逐艦攻撃についての吾々の戦前のドクトリンを入手しており、それを研究しているのを知っていたからである」草鹿提督はさらに尋ねた「そう言われるが、あのドクトリンは実に良くできていた。吾々もそれを使った。何故貴方はそれに従わなかったのか」私は「提督、

結果はどうでしたか」と反問するにとどめた。それを聞いて彼は考えた。その結果とは、日本側が何時も奇襲を受けたという意味であることを彼は知っており、それはドクトリンについて彼が吾々と別々の考え方をしていたため生じたものであった。彼はドクトリンをいかなる逸脱も許されない命令を意味するものと解釈していた。ある意味では、彼は吾々をプログラムしていたともいえよう。そのプログラムは、吾々がそのような方法で戦わなかったため、役に立たなかったのである。

やがて彼はまた尋ねた。「あるときラポールは砲撃を受けた。ラポールを砲撃するためには、貴方はSt. GEORGE海峡を通り抜けねばならなかったはずだ。吾々が地下に潜っており、駆逐艦の小さい大砲では殆ど効果のないことを知っていたはずであるのに、何故危険を冒して砲撃したのか」確かに艦は運動する余地を持たないときには、陸上砲台と戦うべきではない。それは良いルールとして200年も前から認められてきたものであり、今でも健全だ。私は予想していたよりもっと多くの戦闘に巻き込まれて遅くなり、St. GEORGE海峡を通るほかに早く帰る方法がなくなったので、通りすがりの駄賃として射撃をし幾分かの効果期待したのだと説明した。吾々が本当に狙ったのは、ラポールの北の港であった。そこには日本の多くの艦艇と商船が停泊しているはずであった。吾々はSIMSON港の高速掃討を狙っていた。射撃とともに短射程浅海面用にセットした魚雷で奇襲し数分で港内にある全艦船を沈めるつもりであったが、果たせなかったのだ。それを聞いて草鹿提督は言った。「貴方は幸運な人だ。あの一週間前私はシンプソン港に機雷を敷設し艦船は停泊させないことにした」この賢明な立派な日本の海軍士官はまさしく吾々の裏をかいたのであった。

私が言おうとしているポイントは、戦闘では予期しないことが起こる。立派な計画は作ることが出来、また作らなければならないが、実施に際しては、計画通りにならないということだ。天候が悪い、何かが起こる、敵は我が計画を無価値にするために最善を尽くす、しかもその敵は普通なかなか上手だ。他の人は吾々が考えるようには考えない、決して考えない。彼らもまた、吾々がやろうとするように、予期されないことをやろうと努力する。私は未だかつて期待したとおりに、あるいは計画通りに、総てがうまく働いた戦闘に出くわしたことがない。それに最も近かったのは、マリアナ沖の海戦であったが、その時でも予期しないことが起こった。

以上縷々述べたのは、私が実戦でテストされる前に、艦艇の戦闘価値についてコメントするのを好まないということ、説明するためである。

ついでに駆逐艦について――それは他のタイプの艦についても同じことであるが――一つのことを申したい。駆逐艦は、いつでも、何処でも、どんな敵に対しても、戦うことが出来なければならない。私はソ連海軍について何も知らないが、ソ連の持っている装備で何が出来るかを下算するのは極めて危険であると思う。吾々の装備は、ソ連のものより優れているかもしれないが、戦争をしなければならなくなった場合には、吾々をギョッと驚かせるような何かが起こることを予期して置かねばならない。何となれば、吾々の敵は、自分たちが勝てると信じたときのみ戦争を開始するであろうからである。

人々が大変な危急に直面したときに、何が出来るか、そしてそれに成功するか、ということには、時に驚くようなものがある。戦闘特に海戦では、一方の側あるいは一人の人が、頑強に頑張ったために勝利を得た例が少なくない。合理性から見るとあまり勝つチャンスがないように見えるときでも、戦いそして勝った場合も多い。これは総ての戦争で真実である。良い判断を伴った不屈の精神は極めて重要な資質である。また総ての世界の軍隊は、歴史が繰り返し示しているので、訓練が基本であることを確実に知っている。貴方の部下は格別十分に訓練されねばならない。平時に出来る以上のことを戦闘では出来ない。戦闘の成果が演習より優れていることは、決して期待できない。稀には戦闘でより良い成果を上げることもないではないが、それを予期すべきではない。

戦闘中の人間の働きは演習の時ほど良くないのが普通である。故に敵を下算してはならない。

二次大戦中の駆逐艦長が直面しなければならなかったものと、今日の駆逐艦長が直面するものとの違いは、彼が考えることの出来る時間の長さである。私の時代には、何をしようかと考えるのに一分前後の時間があった。今や一分の時間はない。五秒しかない。このことは、総て自動的にやらねばならないことを意味する。われわれが若い当直士官であったとき、指導者はもし人が左舷から海中に落ちたらどうするかを訓練した。風や海上模様を知らず適切な処置ができなければ大変なことになった。数秒の間に下さなければならぬ決心であり、しかもその決心は正しいものでなければならなかった。これが今日の駆逐艦長がやらなければならないことである。彼は数秒のうちに決心しなければならぬ。来襲しつつあると考えられるミサイルに対して、ミサイルを発射するかどうか、たぶん敵であることは確かだが、絶対的に確実ではない潜水艦を攻撃するかどうか、これが、センサーや識別装置が正しく機能を果たしているかどうかを心の中で疑いつつ、数秒のうちに下さなければならぬ決心である。

彼は攻撃しなければならず、そうしなければ自艦を極めて危険な状態に陥れるかもしれない。その反面彼があまりに神経質になると、味方打ちをして味方部隊に多くの被害を与えるであろう。これだけは避けねばならない。さりとてあまり長く待てば、彼は無用の存在となる。それは死んでいるより悪い。何もやらなかった、自分の任務を遂行しなかった、その一部分さえも果たさなかったということになる。

時間は極めて貴重であり、しかもあっという間に過ぎて行く。今日の海軍士官は、私の若い頃の海軍士官に比べて、時間の重要性をあまり評価していないように思う。吾々は時間の重要性について叩き込まれた。明日まで事を延ばすことは出来ない。将来いつの日にかものを習うということは期待できない。今知っていないなら、その場で知るための手段を講ずべきである。駆逐艦長は十分な時間は決してないという事実、何時も直面してきた。もし決心できないなら、決心させねばならない。自動的に事をやるためには部下に依存しなければならぬ。たとえ部下の訓練が不十分であったことを知っても、それはもう遅すぎる。部下をもっと訓練しておくべきであったとの思いが、おそらく死んでいく彼の最後の思いとなるであろう。

以上が質問を契機に披瀝されたバークさんの信念であるが、この講話3年後の1987年5月、ペルシャ湾でアメリカのFFG「STARK」は、イラク機の誤ったミサイル攻撃に何の対策もとらずに重大な損傷を受け、翌88年7月同じペルシャ湾でAEGIS巡洋艦「VINCENNES」はイラン民間機の行動を戦闘機の攻撃と誤判断してこれを攻撃撃墜した。これらの事実はバークさんの先見とその教えの重要性を語るとともに、この教えが今や戦時だけでなく、平時から適用されることも示している。

ここで、バークさんから学ぶことの多い中で、先ずこの有事即応の心構えを取り上げた私の気持ちをお話したい。冷戦が終わって安全保障環境も大きく変化し、軍事力の役割も多様化したのに伴って、海上自衛隊にも多くの任務が与えられ、「働く時代」に入ったといわれている。これらの任務がいずれも重要であることは勿論であるが、海上自衛隊が何のために存在しているかという基本を見失ってはならないと思う。それはいうまでもなく、主として海において侵略の未然防止と排除に当たるすなわち海上防衛のためである。そして政治の目標が未然防止にあるのは当然であるが、その政治の目標を達成し得るためには、自衛隊そのものは物心両面に於ける有事即応を目標に、有事に役に立つ精強な部隊でなければならず、「軍隊の用は戦闘にあり、故に百般のこと戦闘を以て基準とすべし」と教えられていた昔と少しも変わらないのである。これが創設以来海上自衛隊で精強と有事即応が強調されてきた所以であり、今後とも変わってはならないと

思う。ところが、「治にいて乱を忘れず」という教えや「国大なりと雖も戦いを好むときは必ず亡ぶ、天下安しと雖も戦いを忘れるときは必ず危うし」との戒めが、いずれも何千年も前からあるように、人間は平和が長く続くと、努力しないで何時までも、その平和が続くような錯覚を抱きがちなものであり、その挙句国を失った例は、歴史に珍しいことではない。特に平和憲法さえあれば平和が維持できると、妄信している国民の多い我が国では、その落とし穴に陥り易いのではなからうか。

また未然防止を達成するものは、複雑に絡み合った各種要因の総合効果であって、海上自衛隊の精強さと有事即応態勢が、その重要な一つの要因であることはなかなか一般には理解され難く、その効果を計数的に評価することも不可能である。創設以来50年、今頃働く時代に入ったかの如くいわれる自衛隊は、実はずっと重要な働きを続けてきたわけであるが、国民の目には留まらず評価されることも少なかった。今後とも続くと思われるこのような環境の中では、自衛隊自身が余程しっかりしていないと、いつの間にかこの傾向に流され、基本を忘れ精強も有事即応も建前だけにとどまる危険があり、私の恐れるところである。

国民のために存在している自衛隊が、その国民の期待を肌に触れて感じられないということは、任務遂行の意欲に大きな影響を及ぼすものである。私自身歓呼の声や旗の波に送られた戦前と、税金泥棒と罵られた戦後との両方を体験した。しかし考えてみれば軍人がもてはやされる時代は国民全体にとって決して幸せとはいえないのではなからうか。神と軍隊ほど平時は忘れ去られ、ことが起こったとき責めを問われるものはないといわれる。

全身全霊をかけて有事に備えつつ、それが実際に役に立つ日のないことを祈る。この自衛隊の立場に徹することは容易ではないだけに、バークさんの教えを良く噛みしめて有事に役に立つ海上自衛隊であって貰いたいと思う。

さて次はバークさんのいわゆる現場主義について見てみたい。部隊が最も効果的に働けることを中心に常にものを考える。部隊のための中央であって、中央のための部隊ではない、これは当然のこととしてあまり多くを言う必要はあるまい。問題は如何にして部隊や部下の実状から遊離せず、これに即して指導しあるいは施策を考えるかということである。階級があがり、中央勤務が多くなると、余程心掛けていても部隊の実状から遠ざかり、耳に入ってくる情報も快いものだけになり勝ちである。上司の立場からすれば、良いことは急いで聞く必要はなく、良くないことほど当事者を指導しあるいは自ら処置するため、早く知る必要がある。ところが、部下の方では良いことは直ぐ報告して褒めて貰いたい、叱られるようなことは、自分の人事を左右する上司の耳になるべく入れたくないという心理が働き勝ちになる。特に権限が大きく、個性の強い人に対するほどそうなり易い。古来天才的独裁者が一時は成功しても、最後は失敗することの多いのは、このため”裸の王様”になるからである。如何にして本当の実情を知るか、やり方によっては部下の中にスパイをいれるような誤解を招きかねず、それでは統率は成り立たない。そこでいろいろの工夫が昔から為されてきた。さらに部下とのコミュニケーションは一方交通ではなく、上意下達、指揮官の意図の徹底も極めて重要なことは言を待たない。

バークさんは戦争中のニミッツのやり方について、次のように述べている

ニミッツは極めて多忙な人で重要な問題を部下前任指揮官と討議する時間しかなく、彼らの参謀長である代将達と話す時間はなかった。当時私は高速空母任務部隊指揮官ミッチャーの参謀長であった。約6か月WAR ZONEで海上にあった後ミッチャーはマッケインと交代し、吾々は真珠湾に帰って約二ヶ月次の作戦計画を立てた。その間吾々はニミッツやスプルーアンス等の幕僚と極めて緊密に作業した。計画がかなり良く纏まったがまだ完全には固まっていない時期に、

吾々はそれをニミッツとその参謀長に提出し、彼らは幕僚会議を通じて若干の示唆を与えるのが通常の方法であった。時々ニミッツは夕食直前に私を馬蹄投げに誘うことがあった。彼はこの遊びのエキスパートであり、私も下手ではないと自負していたが、実はこの時間は彼が作戦計画の背後に何があるかを見極めるために、厳しく私を質問攻めにする機会であった。ときとして、彼は改善するための示唆を与え、あるいは計画の理由についてコメントした。私は彼からリラックスした雰囲気の中で、次の会議での意見の相違をなくすのに役立つ多くの背景情報を得たり、あるいは相手に伝えることを学んだ

バークさん自身はCNOに就任したとき、全員に言葉をかけ、また海軍の現状について自ら確実に情報を得るという決意をした。このため彼が実行したのは

- 0 定期的に自ら将官宛個人的なニュースレターを書いた
- 0 度々全海軍に宛てて、何が為されつつあるかだけでなく、何故かを説明する出版物を発行し、そのコピーを総ての艦とSTATIONに送った。
- 0 自分自身宛の手紙を歓迎し、それぞれに返事を出した。このことが自ら処理できない負担となったとき、スタッフに返事の起案を割り当てた。この仕事は直ぐにスタッフの週末全部を費やすようになった。返事は迅速で明瞭、正確かつピタリとしたものでなければならなかった。手紙とその返事はバークさんに提出され、バークさんはこれを精査した。彼が不適当な返事と認めたとときの怒りは大きかった。起案者は直ぐ呼びだされ叱り飛ばされて書き直しを命じられた。
- 0 出来るだけ艦や基地を訪問して質問した。その質問はオペレーションや装備に関するありふれたものではなくて、例えば指揮官に対して、海軍について、自分の部隊についてあるいは部下について、最も誇りに思うことは何か？最も誇れないと思うものは何か？軍内の誇りを呼び起こすために何をやっているか？戦闘効率を改善するために何が出来るか？といった調子であった。士官に対して時間の浪費、経費の浪費あるいはやめるか減らすか、新しく考え直した方が利益になると思う古い活動を見たことがあるか、それはどんなものかと尋ねたこともあった。
- 0 ペンタゴンの廊下で驚いている士官を引き留めて長話をし、彼らの活動や彼らの部門の活動について質問攻めにすることもあった。
- 0 数人の快活な精選された士官を海軍中に派遣した。それはスパイとしてではなくて、バークさんの海軍についてのアイデアを広め、部隊の人が彼らのCNOと分け合うことを望む事実やアイデアを拾い上げる非公式なコミュニケーションのためであった。

0 二週間ごとに、幕僚とその夫人達の援助を得て、総ての階級の士官とその夫人のためのパーティーを主催した。これはバークさんが彼らの見解を探り自分の考えを述べるためであった。天気が良くてお客が外のグラウンドに溢れても良いときは、500人ものレセプションを催したという。

そのバークさんは、退役後下級者とのコミュニケーションとして次のようなことを述べている。

下級者は一般に、自分の意見が望まれていると考えない限り、進んで意見を述べることは少ないものだ。私は部下から情報を得るために一寸したことを沢山行った。

- 0 その一例： 私は二週間ごとにNAVY DINNER、MESS DINNERを実施して、若干の若い人を呼んだ。例えばSAMに関係した人そして可能であればSAMに反対する人一二名、食後飲み物を持ってみな円く集まり、下級者が先ず話すという昔ながらの習慣に従った。中尉が立ち上がり彼が為さるべしと考えていることを発表する。他の誰かが口を開く前に、一番若い人に話させた。誰も彼または他の下級者を直接批判することはしない。皆はただ主題について語るだけ。この方法が何時もうまくいった。若い人が間違っているとしてその話を中斷しないよう、前任者は極端に抑制的な態度をとることにした。

0 他の例： 命令を出した後、時々ラインの上から下まで、若い人古い人の一群を集めて「この命令について何が起きているか、本当に何が為されているか、事実を私に報告せよ」と命じた。例えばある場合は命令を出してから二週間ぐらい後に、私は大尉を呼び、中佐を呼び、この命令が実際どう扱われているかをチェックした。私の命令通り行われていない場合は、その命令を出す前に通常熟慮していなかった。その命令は、実施に当たって少し直されるか、適当に解釈されるか、あるいは無視されるか、つまりそうなるであろうと期待したとおりにはいっていなかった。私は指揮系列を通じる以外には何もせず、訂正するための行動もとらなかつたが、得られる限りの情報を集めた。私は、女房たち、副官たちからも情報を得たが、ことを正式にチェックするかどうかを決める以外には使わなかつた。

0 別の例： 私がCNOになる前、大西洋駆逐艦部隊指揮官であつたとき、NEW PORTに司令部を置いていた。ニューポートは入港容易な港だ。時として霧がかかるが悪くはない。あるとき新しい艦長の乗った一隻の駆逐艦が入港してきた。彼はパイロットを要求してきた。ところで私はSTAFFに部下の要請や意見に対してNOというのは私だけと指示していた。誰かが許可を要求してきたとき、YESという回答はSTAFFで出して良いが、私以外の誰もNOと言うことは出来なかつたのだ。この指示はこのとき働いた。私は「彼はパイロットを使うべきではない。私が行ってこの艦を入港させる」と言った。STAFFは止めたが、私は「畜生！出来ないことがあるか」と言って出かけ、バージでその艦と出会い舷側を上がって言った「私が艦の指揮を執る」。艦長は「提督、私は入港できます」と言ったが、私は「NO、艦長、貴官はパイロットを要求し一人を得た、私が入港させる」と答え、入港した。私がやらねばならなかつたのはこのときだけだつた。

この話は瞬く間に艦隊に広がり、再び誰もパイロットを要求しなかつたからである。

0 もう一つの例： 同じく駆逐艦部隊にいたとき、毎夕方自分の車を運転してうちに帰つた。帰宅の途中、士官か水兵あるいはドックの傍にいる誰かを拾い上げて途中でいろいろ話した。私はポケットの中に手帳を何時も入れていた。彼らには何時も何かの質問をした。どの艦に乗っている？その艦はどうだ？その艦は何をやっている？その他艦についてのあれこれ総てのことを尋ねた。こうして私は、艦と艦長について一つの輪郭を捉えた。二三月の後には、部下の艦について、かなり良い輪郭と悩みの種を得た。彼らは時々本当のことを私に語つたが、必ずしも何時もではなかつたであろう。しかし彼らが真実の総てを語らなかつたときでさえも、私は沢山の真実を得ることが出来た。私の艦長は人間のくずですとか、そのような種類のことは誰も言わないが、半分悪罵に聞こえても、私から見れば賞賛すべきだと思うことも多かつた。

私は艦長について沢山の秘密情報を得たので、CNOに成るよう呼ばれたとき、この手帳をポケットに入れていった。どうしても中佐の副官を決めねばならなくなつたとき、この手帳を見てどの艦のどの艦長が最善かを見つけた。私は彼に会つたことはなかつたが私の手帳の中では最も評判が良かった。誰もその艦を好み、艦長と彼のやることを好んだ。(中略)彼は本当によい副官になり、今も非常に仲の良い友人だ。この結果は、私が誰にも沢山の質問をしたことだけで、もたらされたものであつた。

諸君はいろいろの質問をすることが出来る。この試練についてどう思うか？失敗したのをどう思うか？彼らは何かを語るであろう。たいていの場合彼らの語る内容はそれほど重大ではない。ときには君は指針を得るであろうが、それは実に良いことだ。この質問が効果のあるのは、人々に少しは考え始めさせるということであり、次に君が彼らと話すとき、彼らは心の中に何かを持っているであろう。またあの指揮官は部下に質問をするという話が広がり、彼らはその指揮官に興味を覚えるであろう。関心は君が得なければならぬ一つのことである。

士官は知覚の鋭い聞き手でなければならない。何故なら屡々語られないことは語られることよりもっと重要であるからだ。実行を重ね経験をj得るにつれ、若い士官は正しい質問を行う才能をj発展させるであろう。

以上パークさんの考えと彼が実際にやったことの一端を紹介した。勿論時代も国情も異なりそのまゝの方法ではやれないものもあるが、部隊を中心にものを考える、部隊と部下の実状を常に承知する、上下の意志の疎通を図る、といった基本が変わることはないであろう。皆さんにもよく参考にして貰いたい。

時間も迫ってきたので簡単にパークさんの自助努力について触れてみたい。彼はロッキー山麓の貧しい農家からアナポリスに入って初めて海を見たのを手始めに、人生を通じて、思いがけない仕事、予期しない配置を与えられることが度々であった。そのいずれの仕事でも彼は喜んで責任を引き受け、骨惜しみなく全力を尽くした。彼の素晴らしい働きぶりによってより困難な仕事を与えられることも多かった。そして省みてその責任を果たすためにあるいは自らに足りないと思ふ分野を補うため、自分で勉強し自分を啓発した。これら総てが彼の大成に役立ったのである。

卒業後最初に配属されたのは戦艦アリゾナであった。二重底を清掃し錆を落とす作業隊の監督は、輪番に若い士官に与えられる厭な仕事であった。湿気のある狭い空間、立っておられないほど低い天井、ポータブル電灯で行う錆落としと塗装、吐き気を催す空気といった状況下、責任者の士官はろくに検査せず急いで終わらせる傾向があった。アリゾナのFIRST LIEUTENANTはある区画が何時も腐食を免れよく清掃されていることに気が付いた。それはパーク少尉が担当している区画であった。彼はその報償として全二重底の永続的監督者に成るよう勧め、タフな骨の折れる仕事はしばしば最も重要なものだと言った。二重底に送られる作業隊は面倒を起こした罰としてこの仕事を命じられる手に負えない連中であった。彼の作業隊は一区画を綺麗にしたあと、次の暗い悪臭に満ちた区画に進まねばならなかった。それは厳しい難しい仕事であったが、パーク少尉は自分の仕事が認められての新しい挑戦と考えた。此の二重底では彼はボスであった。彼は部下の作業中は常に部下とともにあり、塗具の臭いが息苦しいようになると交代で部下を上甲板に送って新鮮な空気を吸わせたが、彼自身は時々窒息しそうになるのに耐えて仕事を離れることはなく、そのタフさを示し、心理的な優越感を持って部下を指揮した。

アリゾナでパークさんは初級士官の通常の教育的勤務として、機関士から庶務主任に至るまで多くの勤務を経験したが、彼の主たる関心は大砲と魚雷にあった。砲術長の勧めに従ってPLOT TING ROOM(発令所)の機器の操作法と操作員の監督について粘り強く勉強し、長としての資格を得た。また副長や幕僚を熱意で説得してフォード社の対空方位盤システムの講習に参加、やがて設置された方位盤の運用に当たった。忙しい勤務の間、海軍大学の戦略戦術通信教育に応募しこれと終了した。

アリゾナで5年勤務した後。彼は艦隊支援艦に転勤、航海士となったが、この艦には艦砲射撃の写真観測を行うカメラ隊があり、本務の傍ら此の作業に興味を持ち実際に参加して良く研究、十分な技能を開発した。このことはその後の勤務で大いに役に立った。

中尉の末期28歳のときPGコースに選抜され、アナポリスで1年猛烈にORDNANCEの基礎を鍛えられたあとミシガン大学化学工業(燃料、爆発物)修士課程を一年で終了MASTER OF SCIENCE IN ENGINEERING の学位を得た。NAVAL ACADEMY卒業後唯一の正規の教育であった。

その後装備局関係の陸上勤務と艦隊勤務を繰り返したが、艦隊勤務の中では以前の研究が

認められASSISTANT BATTLE FORCE CAMERA OFFICERとして極めて多忙な配置をあたえられたこと、砲術の特技を活かしたいとして熱望した戦艦勤務の代わりに、駆逐艦の副長次いで駆逐艦長を命じられ、休むことのない推進力と厳しさ、その結果の優れた成績に対する賞賛と誇りによって部下を引っ張り、31ノットバークへの道を開いたことが、注目される。

戦時中及びその直後の努力とその成果は既に述べたところである。ミッチャーがなくなったあとGENERAL BOARDの一員に任命された。これは、従来と全くあり方を変え、海軍のTHINK TANKとするため、全員戦闘経験を持ち、自分のアイデアを発展させそれを説得力のある言葉で明確に表現出来る、中佐から提督までの有能な人をもって編成する、という構想に基づくものであった。バークさんはそれまで当面の問題に全力を注いできたので、専門の分野では人に負けない自信を持っていたが、新聞や人との会話では理解できないことが多く、一般教養の不足を痛感するようになり、戦争以来与えられた総ての休暇を利用し、歴史、経済、科学、政治、国際関係などにおける知識の不足を充たす本や論説をむさぼり読んでいた。今回の任命で、戦時迅速に動員し膨張する艦隊の面倒を見る能力を損なわずに、効率的に平時の支援を行う基地、補給所、工廠等の規模、位置、あり方等が課題として与えられ、それには軍事的考慮だけではなく、経済的、政治的見地も配慮しなければならなかった。バークさんはまだ学ぶべきことが如何に沢山あるかを知り、経済、政治、国際問題の研究のためWASHINGTON'S BROOKINGS INSTITUTIONに加入し、毎週の討議と討論に参加した。

彼はやがて米国が次の10年間どんなコースで進もうとしているかを予測しない限り、自分の仕事が出来ないと知り、それこそまさにGENERAL BOARDのやるべき仕事ではないか、すなわち、米国が海軍兵力を用いて対応しなければならぬ世界情勢の展開とその場合必要になる国家資源について研究し書類に仕上げるのが最も重要な仕事であるとの結論に達した。しかし同僚は賛成せず具体例を示すよう要求した。そこで彼は当面の艦船局関係の研究を続けつつ、局の将来の運用について判断するのに必要とする海軍、米国、世界にわたる情報を集め大量のノートを作った。この研究から彼は、国内で補えない戦略資源や原料そして石油の問題に気が付き、政府の各部局と話して、何処も将来対策を研究していないのに驚いた。バークさんは日に20枚以上数ヶ月の間書いてやるべき研究の骨組みを示し、同僚を説得して次の10年間の国家安全保障の問題について書類を作ることになった。

中東の研究も彼が自らに課した課題の一つで、その成果は同僚の評判も良く、国防長官や各軍にも送られた。こうして”次の10年の国家安全保障と海軍の貢献”が作成された。

この間の彼の歴史、経済、政治及び国際関係についての猛勉強と多くの人との討議さらに書類の作成は殆ど海軍士官を飛び越えた世界的視野を彼に与え、また高位に上がるべく運命づけられた注目すべき人物との評判が海軍の仲間の間に広がった。

このあとバークさんはOP23(三軍の統一に関することについて研究しCNOに助言する)さらにOP30(戦略計画)の長として、それまでの基盤に基づき、有力な敵対海軍が消滅した核時代に於ける海軍の意義と特質、そのあり方の研究を重ね、シビリアン長官とそのスタッフ、議会、陸軍、空軍、マスコミなどへの説得、交渉、調整等を経験し実際から多くを学んだ。こうした自助努力の総てが、彼のCNOへの道を開き、その成果の源となったのである。

バークさんがCNOのとき身近に仕え、後にCNO次いで統合参謀本部議長になったMOORE R提督は「彼は手元にある仕事を実行するために如何にして人を選出するかを知っていた、彼は得らるべき目的を示し、自由を与えた。だから彼のために働くのは易しかった、それは刺激的な経

験であった。彼は確実な結果を望んだが、そのやり方は示さなかった。そして下にいる人間を最善に使う自由を許した。彼は良いマネジャーだった」と言っている。

バークさんを褒める人ばかりではなく、その厳しさ、なかでも自分と同じような仕事への努力を要求したことに辟易した部下もあったようである。しかし彼の国家と海軍に対する誠心誠意の無私の献身に動かされない人はなかった。先程のムーラー提督は言う「彼は地の塩、今世紀で彼ほど海軍にIMPACTを与える人があろうとは思えない。積極的な闘志、技術的な能力、人間に対する理解を併せ持った彼は、彼とともに勤務した総ての人から尊敬とまさに愛情をもちえた」と。

バークさんに学ぶべきことは、まだ外にも多く、ことに政治との関係、マスコミの扱い方、外国海軍との交流、部下への委任などは機会があれば勉強されたらよいと思う。